

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22720293

研究課題名(和文)立石寺の庶民信仰の実態的解明と霊場としての景観復元

研究課題名(英文)Elucidation of the common people faith of the RISSHAKUJI and reconstruction of the scene

研究代表者

荒木 志伸 (Araki, Shinobu)

山形大学・基盤教育院・准教授

研究者番号：10326754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：立石寺の参道の石造文化財の悉皆調査を実施し、約8割近くについて形式や石材の記録と、銘文の解読が終了した。石塔の総数と形式数の把握ができ、特に磨崖供養碑の時期や建立主体の特徴について、その全体像を把握できる段階になった。その成果については『季刊考古学』121号等に公表している。なお、立石寺の石造文化財の特徴を鮮明にするため、比較検討対象となる慈恩寺、出羽三山(羽黒山)、松島瑞巖寺など数か所のフィールドについて調査をおこなった。なお、高所にあり調査困難であった立石寺の磨崖供養碑について、三次元レーザー計測の試行をおこない、良好なデータを取得することができた。

研究成果の概要(英文)：On an approach to the approach to Risshakuji, I was subjected to a complete enumeration of the stone pagoda. As a result, the record of stone or form, decipher the inscription is completed for stone cultural assets of about nearly 80%. Further, it was possible to conduct a trial operation in the field of three-dimensional measurement, and to obtain good data. It was possible to fit the sort operation of the data, to advance research toward the results published. It is to be noted that the survey results at the current stage, and has published "Quarterly archeology" in No. 121, such as an intermediate report. Further, in order to sharpen the features of Risshakuji was recommended site survey field as several relevant.

研究分野：人文学

キーワード：石造文化財 霊場 山寺立石寺 石塔 庶民信仰

1. 研究開始当初の背景

近年、墓標をはじめとする石造文化財の悉皆調査が各地ですすんでいる。その背景として、文献の限られた地域でも豊富な文字資料を新たに獲得でき、往時の一般庶民の信仰(精神)面へのアプローチが可能になることがあげられる。また、形式の検討により地域的な特徴や階層性を導き出し、石材の分析から交易の問題に迫るなど、地域の歴史を解明する上で石造文化財は非常に有効な歴史資料であるといえる。

2. 研究の目的

山寺立石寺(以下、本文では立石寺と記す)は、東北屈指の霊場でありながら、全貌に迫る研究は少なかった。歴史的にみても戦国期の争乱に巻き込まれた影響などにより、寺内に残された文献史料は限られている。そこで、参道に残る石造文化財を考古学的手法を用いて調査し、その分析をおこなう。それらの検討により東北地方の庶民信仰の実態を解明すると共に、立石寺の霊場としての景観を復元することが研究の目的である。

3. 研究の方法

根本中堂から奥の院の間に存在する磨崖供養碑、石塔、石燈籠の悉皆調査を行う。

すべての石造文化財について、形式、額形式を確認し、また法量(幅・高さ・奥行)について調査カードに記載した。銘文については、LED懐中電灯を使用し文字の解読をおこなう。石塔と石燈籠については石材のチェックを行う。なお、特徴的な石造文化財については、写真撮影する。

取得したデータについて、立石寺の山麓域にあたる天童市域 2500 基の石塔データと照合し、立石寺固有の特徴について明らかにする。また、霊場内の石造文化財の存在の仕方について、同規模の各地の霊場を現地踏査し、比較検討をおこなう。



写真1 奥の院地区での調査風景

4. 研究成果

(1) 調査全体について

石造文化財のうち、約8割について調査を完了した。銘文の解読について、従来のデータを精査した結果、調査項目を追加したり、強力な懐中電灯の使用により開催毒するこ

とでより精度の高いデータが取得できる地区ができた。したがって、本研究ではすべてを完了するには至らなかった。しかし、石塔の全体数を把握し、それぞれの年代や形式等の検討、銘文内容の分析が進んだことは大きな成果といえる。なお、表1に示したものが、立石寺山内に存在する石造文化財の内訳である。

	境内山麓地区	参道地区			奥の院地区	計
		参道	墓地	小計		
磨崖供養碑	1	223	0	223	32	256
尖塔角柱	0	0	2	2	0	2
櫛形	0	14	27	41	1	42
空塔婆	4	16	17	33	5	42
自然石	18	70	53	123	2	143
有像舟形	7	89	74	163	34	204
石塔類	4	18	44	62	1	67
平頭角柱	3	2	4	6	0	9
板碑形	4	0	2	2	0	6
有像(地藏)	1	13	3	16	0	17
無縁塔	0	30	34	64	8	72
五輪塔	0	2	0	2	0	2
石燈籠	17	65	23	88	8	113
その他	6	2	5	7	0	13
計	65	544	288	832	91	988

表1 参道の石塔の数

(2) 磨崖供養碑について

凝灰岩質の岩表面に、碑形や文字を直接刻んだものが、磨崖供養碑である。参道に集中し、223 基を確認することができた。奥の院地区に視認できるものが 32 基あり、寺内全体で 250 基ほどになると考えられる。

参道の約3割にあたる 87 基の磨崖供養碑が刻まれている弥陀洞地区について分析した内容について述べていきたい。

①年代

最古の年号は、元和 9 (1623) 年、最新のもの天保 9 (1838) 年である。これは寺内を通じ、磨崖供養碑にみえる最古、最新の紀年銘である。磨崖供養碑は中世期に遡るものではなく、すべて近世の所産と位置付けられる。87 基のうち、約3割にあたる 21 基について、年号が特定できた。年号は、戒名の脇に併記され、没年を示したものであろう。

17 世紀第3 四半期と、18 世紀第1 四半期に、2 度の小規模なピークが認められた。

紀年銘からみる限り、磨崖供養碑は 17 世紀第2 四半期に出現し、同時期の後半頃から本格的に造立が開始する。その後は増減を繰り返しながら 18 世紀第3 四半期頃を境として一気に減少し、18 世紀末には、ほぼ終焉を迎えている。

②形式

87 基のうち 86 基が板碑形である。これは、参道全体に範囲を広げても、256 基のうち 253 基が板碑形と圧倒的な傾向である。板碑形以外の 3 基は、不定形のもので 1 基(参道)、形式を持たず文字のみを刻むケースが 2 基(弥陀洞、本坊脇)である。

異様なまでに板碑形に集中する様子から、建立の際に山内側から何らかの規制が働いた可能性を考慮すべきであろう。全国的にみても板碑が消滅した時期に、あえてその形式

を採用し近世後期まで継続し続けることも、この仮説と矛盾しない。

③文字内容

磨崖供養碑 1 基につき、1 名から最大で 8 名が記される。全体的には、複数名の戒名が記されることが多い。

位号をみると「信士」「信女」「居士」「大姉」とあり、成人戒名がほとんどを占める。「童女」や「童子」と記された例は、弥陀洞に 1 例、それ以外の参道に 1 例と、僅かである。なお、数の上で男女差はない。

道号については、「譽」や「釈」がみえ、浄土宗あるいは浄土真宗の戒名が刻まれていることが確認できた。これらは、近世前期の段階から存在する。特に、浄土宗の戒名は多く、弥陀洞だけでも 20 基に 26 名分が刻まれる。浄土真宗の戒名は 2 基に 2 名分が確認できる。

一方で、院号をもつ戒名は確認できていない。山麓域の三宝寺や佛向寺では、18 世紀初頭から、既に院号が墓標上に出現している。磨崖供養碑が 18 世紀末まで造立されることを考慮すれば、大きな違いであるといえよう。

次に、地名であるが「山形横町」「山形六日町」「西里村」「新庄舟形町」「高橋村」「寒河江西町」などが確認できた。いずれも施主名と共に刻まれる。西里村は現在の河北町内、高橋村は現在の尾花沢市内と推測される。後述する例外的な 1 例を除き、すべて現在の山形県の範疇におさまり、特に村山・最上地方に限られている。庄内・置賜地方の地名については、現段階で確認されていない。近世中頃までの立石寺の信仰圏を考える上での一材料となろう。

なお、近世期に山寺立石寺を訪れた松尾芭蕉の『奥の細道』三二段には「一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、其間七里ばかり也。」(元禄 2 (1703) 年) とある。芭蕉に立石寺への訪問を強く勧めたのは尾花沢、つまり山形県最上地方の人々であった。芭蕉の当初の旅程に立石寺は入っておらず、近世中頃における江戸での知名度は、必ずしも高いとはいえない状況にあった可能性がある。

なお、例外的なものとして、「下野国都賀郡日光」の地名が刻まれた磨崖供養碑が 1 基ある。参道四寸道の脇の岩場に、下野国からの来訪者が享保 13 (1728) 年に刻んだもので、「観儀妙霜禅定尼」と 1 名分の戒名が刻まれる。その性格については廻国供養的なものか、円仁の出生地である下野国都賀郡と関連するものかなど、現段階では妥当な解釈を見いだせていない。ちなみに、寺社間での関東と出羽国との頻繁な交渉については、天正 9 (1582) 年の銘を有する立石寺所蔵の漆塗り紙皿 50 枚は群馬県箕輪東光院の弘賢の寄進によるものなど、近世以前の段階から認められる。

施主名と考えられるものについては「片桐

市郎兵衛」「市村惣兵衛」「市村口衛門」「市村一良治」「市村太良治」「大沼□□□(惣兵衛か)」「伊藤金兵衛」「和久井次左衛門」「邊見□□□」「大沼重三□」「大沼想右衛門」などが確認できた。いずれも苗字を有し、名前のみ記される場合はない。男性名のみ限定され、女性名は 1 例もなかった。以上のことから、地域社会のなかで、ある一定の階層に属するような人びとが施主となり、磨崖供養碑を建立したものと考えたい。

(3) 石燈籠について

113 基存在する。注目したいのは根本中堂脇 1 基、山門手前 2 基の古様式を呈するものである。山門前のものは、寛永 5 年に高須源兵衛により建立されている。後述する高須弥助の板碑形石塔の施主で、鳥居氏が信州高遠藩に在した折には家老を務めた人物である。

上記の 3 基以外は、近世後期以降に属するものが多い。文字内容からは、磨崖供養碑や石塔類の建立と共通した意図を認めることができる。あるいは、石塔類の設置も限界に達し、石燈籠へと転換していったのではないだろうか。ちなみに、こうした納骨や供養行為は木製の塔婆である後生車に引き継がれ、現在も連綿と続いている。

(4) 石造文化財の分布と霊場立石寺の景観

磨崖供養碑は、弥陀洞や百丈岩を臨む四寸道周辺などの参道内でもランドマークとなるような地点や、何らかの特徴的な施設の近くに建立されることが多い。

一方で、石塔類は、鳥居忠政供養塔や姥堂近くの最古の石塔のように特殊な部類として出現し、寺内のなかでも山麓付近に造立されている。ただし、寺内の石塔類は移動に伴い、元位置ではないものがあるといい、注意が必要である。しかし、墓地という特定の空間を山門脇の参道から見えない空間に設定し、参道でも古手の石塔は標高の低い位置に多い。したがって、石塔類は山麓域から徐々に建てられていったのであろう。

以上のことから、現在のような様々な石造文化財が寺内に林立する景観は、近世以降、段階的に形成されたものと考えられる。

(5) 関連霊場の調査

山形県内には、立石寺と同等のスケールを有する霊地・霊場が存在する。立石寺での調査を同じ項目で、それぞれの主要な地区に関して石塔の調査を実施し、取得できたデータを比較した結果、霊場としての性格の違いが石塔に明確に反映されていることを、明らかにすることができた。

慈恩寺では、格の高い僧侶の墓石が、形式的には自然石である比率が非常に高いという固有の特徴を明らかにすることができた。出羽三山でも羽黒山参道の御本坊平、霊祭殿地区の石塔の調査を行い、近世前期の段階から東日本全域から羽黒山に関わる人びとが

多く存在し、それらに纏わる資料を発見することができた。また、宮城県松島町の瑞巖寺周辺や雄島にも、立石寺の磨崖供養碑に類似した石造文化財群が存在することが判明した。一部について調査したところ、瑞巖寺や雄島に参拝した人びとには地元のみならず、岩手や山形からの人びとが来訪したことが判明した。

以上のように、関連霊場の石造文化財を調査することにより、各霊場の保有していた信仰圏の地域・年代による違いが、考古学的に明らかにできる可能性がでてきた。しかし、個々の霊場の石造文化財は質量ともに膨大で、本研究内での実施は難しかった。しかし、これらを調査することで、結果として立石寺の信仰圏の分析上でも非常に重要な情報ともなり、さらには東北地方の基層信仰の解明も期待できる大きな課題といえる。今後はこれらの悉皆調査についても視野に入れていきたい。

なお、立石寺の磨崖供養碑については、山口欧史氏の協力のもと、三次元レーザー計測による測量を試行したところ、高所に位置し調査が不可能であったものについて、法量の記録が可能となった。また、銘文解読においても、様々な可能性があることを確認した。立石寺の石造文化財データの精度を上げる上で有効な手段であり、その手法を積極的に取り入れていきたい。



写真2 慈恩寺での調査

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 荒木志伸、立石寺の霊場変遷と景観、考古学雑誌、査読有、第96巻第4号、2012、pp 11- 31
- ② 荒木志伸、山寺立石寺、季刊考古学、査読無、121号、2012、pp 37- 40
- ③ 荒木志伸、墨書土器からみた山寺、季刊考古学、査読無、121号、2012、pp 73- 76

[学会発表] (計9件)

- ① 荒木志伸、山寺立石寺の石塔調査から、村山民俗学会発表会、2012年8月26日、山形市市民活動支援センター(山形県山形市)
- ② 荒木志伸、山口欧史、新野一治、森田義史 霊場松島の考古学的研究、日本考古学協会大会、2014年5月18日、日本大学(東京都世田谷区)
- ③ 荒木志伸、羽黒山参道の近世石塔に関する一考察、日本山岳修験学会大会、2014年9月15日、由利本荘市文化交流館(秋田県由利本荘市)

[図書] (計1件)

- ① 荒木志伸 他、洋泉社、北陸から見た日本史 2015、223

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 志伸 (ARAKI Shinobu)
山形大学・基盤教育院・准教授
研究者番号：10326754

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：